

〔續日本紀三十七桓武〕延曆二年正月乙巳、饗大隅薩摩隼人等於朝堂、其儀如常、天皇御閣門而臨觀詔進、階賜物各有差、

土蜘蛛 國栖研

土蜘蛛ハ、一ニ國栖クハト云ヒ、又ハ掬脛カハギトモ稱ス、上古各地ニ散在セシ種屬ノ名ニシテ、其人ト爲リ、體軀短小ニシテ手足頗ル長シ是レ蓋シ、土蜘蛛、八掬脛ノ名ノ由リテ起ル所以ナリト云フ、而シテ其性勇猛驚悍ニシテ膂力ニ富ミ、常ニ穴居シテ、屢良民ヲ侵害セシカバ、神武天皇以降、神功皇后ノ朝ニ至ルマデ、或ハ天皇親征シ給ヒ、或ハ皇子偏帥ヲ遣シテ之ヲ誅戮セシメ給ヒシ事、史ニ其跡ヲ絶ザリキ、

國栖ハ、グズト云フ、蓋シ亦土蜘蛛ノ類ニシテ、大和國栖、常陸國栖等ノ別アリ、大和國栖ハ大和國吉野河上ニ居リ、其性甚ダ淳朴ナリ、神武天皇ノ朝、既ニ王化ニ服セシカバ、天皇其始祖ニ磐排別之子ノ名ヲ賜フ、應神天皇吉野ニ行幸ノ時、始テ醴酒ヲ獻ジ、歌曲ヲ奏ス、爾來常ニ朝貢ヲ闕カズ、且ツ大嘗祭、及ビ元日白馬等ハ諸節會ノ時、朝參シテ、御贄ヲ獻ジ、歌曲ヲ奏シシガ、一條天皇ノ頃ニ至リテハ、此事遂ニ廢替セリ、常陸國栖ハ、其性極テ狼戾ニシテ、常ニ盜掠ヲ事トシ、皇化ニ服セザリシカバ、朝廷屢兵ヲ發シテ征討シ、遂ニ之ヲ誅鋤セシメ給フ事ハ諸國土蜘蛛條ニ載セタリ、

名稱

〔倭訓栞前編十六〕つちくも 日本紀に土蜘蛛と見えたり、太古暴戾にして王化に従はず、巖居し

て、毒害を縦にするもの、稱なり、

〔釋日本紀九述義〕土蜘蛛